

助け手

喜日子

インコはいつもぴとぴとぴとと
あとをついてきたものだった

あの日もぴとぴと足元に
知らず踏み出した私の重みが
インコの上に乗ったのだった

カゴに戻るもふらふらしてた
手を差し出すと乗ってきて
そうして小さな臉を閉じた
永遠に

ごめんなさい　ごめんなさい

遠くから手紙をくれた人がいた
ことりに詳しい優しい人まだ見ぬ人

抱えきれずにこぼれる涙
言葉に綴ってみませんか
順番なんて考えないで
こぼれて落ちる気持ちのままに、と

綴る言葉はあふれ出た
声に出せない後悔言い訳自責悲しみ
文字の衣を纏ったら
ほどけていった心

ことりが旅立つ時にはね
飼い主の手にいることが多いのですよ、と
残る力で私の手に乗ってきた
インコはゆるしてくれたのか

ごめんねがありがとうに変わった